

大学における定期健康診断の現状と課題—健康白書をめぐって— 診察から—内科，眼科，耳鼻咽喉科，皮膚科，歯科

長崎大学保健管理センター 石井伸子

はじめに

定期健康診断で医師の診察を伴う項目は、ある意味で健診の主体をなす部分と言えるが、学生数が多くなると担当医師の負担とその確保は大変である。また、医師の専門性によってチェックのレベルも種々で、健診事情の異なる各大学のデータをひとまとめに評価することが難しい領域であるとも言える。今回の全国調査は、はじめての電算処理ということもあって、調査結果の入力様式の関係でチェックレベルを十分に評価出来ない部分があり、今後の課題となったが、参加大学数、受診学生のデータ数は前回の「白書1984」に比べ著しく増加している。内科，眼科，耳鼻咽喉科，皮膚科，歯科について、主としてその異常率の成績をまとめた。

健診結果

各科の健診結果の全体的なまとめを表1に示した。健診データを寄せた大学（実施大学）のうち、個々の所見について一種類でもデータのある大学について集計を行った（集計大学）。前回の「白書1984」と異なる点は、皮膚科を新たに加えたこと、集計大学数が歯科を

除いて、2～4倍に増加し、集計データ数（受診者）も2～3倍に増加したことである。診察にあたった医師は、内科では大部分が内科医であったが、眼科，耳鼻咽喉科は約半数が専門医で、皮膚科では皮膚科医の診察は1割にとどまった。何らかの歯科検診を試みた大学は15校であったが、歯科医が担当した7大学中、判定基準が異なる1大学を除き、6校について集計を行った。

各科のうちで最も有所見率が高かったのは、歯科の94.6%で所見のない者はごくわずかであった。ついで耳鼻咽喉科の8%、その他は3～4%であった。前回の白書では、各科毎の有所見率は出されていない。

内科検診

貧血，心雑音，不整脈，甲状腺腫，肝腫大のいずれかについて項目別のデータが寄せられた73大学の成績から、項目別の検診大学数，異常率を男女別に図1に表わした。「白書1984」¹⁾の成績を右側に対比して示した。前回は内科医が診察している大学27校に限って集積されている。

今回、最も高頻度にチェックされている所

表1 診察結果

	実施大学	集計大学	受診者	有所見者	%	専門医%
内科	82	73	156,600	6,244	4.0	93.4
眼科	36	30	56,274	1,925	3.4	47.5
耳鼻科	35	32	55,900	4,481	8.0	54.2
皮膚科	30	29	50,824	1,581	3.1	11.3
歯科	7	6	10,948	10,354	94.6	100.0

見は心雑音の70校で、貧血、不整脈、甲状腺腫は約60校でチェックされている。1984年と比較すると、今回の白書で実施校が著明に増加したのは不整脈で、新たにチェック項目に加えた大学が増加したことがうかがえた。逆に腹部の診察をして肝腫大をチェックした大学は7校から1校に減少した。必要に応じて腹部診察を実施する大学は多いと思われたが、腹部の触診検査は仰臥位で行わなければならないので、全員に実施するのが困難なためと思われる。

有所見率について両年度とも注目されるのは、貧血、甲状腺腫が女性に高率にみられることであるが、今回の調査では女性の有所見率が低下傾向にあり、性差は少なくなっている。内科検診における貧血の有所見率は男0.23%、女0.81%であるが、今回の白書の血液検査のデータでは²⁾、血色素が男12g/dl、女10g/dl未満の頻度が、それぞれ0.26%、1.0%で、ほぼこれに匹敵する。甲状腺腫について、これまでの大学生の甲状腺検診の報告では、岸田ら³⁾が7.9%の高い有所見率と、男女比1:2~5をあげている。太枝ら⁴⁾は甲状腺専門医の再判定により1.3%の頻度を報告している。いずれも今回の0.58%に比べ高率である。チェック校が増えた不整脈の有所見率は0.41%であったが、心電図検査からみる

と⁵⁾、不整脈の頻度は精検が必要とされたものだけでも8%に上っている。心雑音は0.73%であるが、これは学校保健統計⁶⁾による高校生の「心臓の疾病と異常」の頻度0.6~1%と一致している。

眼科検診

個々の項目別の実施校数、有所見者の頻度を図2に示した。前回1984年には、全項目について診察が行われた13校について集計されたが、今回は1項目でも実施した大学を加えたので20~29校の集積となっている。

両年度とも結膜炎の頻度が最も高く約1%に認められた。その他の所見は0.2%以下と極めて低率である。

耳鼻咽喉科検診

耳鼻咽喉科の検診では、前回の検診項目から中耳カタル、外耳道炎を省き、難聴と頭頸部腫瘍を加えた。2名(0.01%)しかいなかった頭頸部腫瘍を除いた各項目の有所見率を図3に示した。集計大学32校のうち耳鼻科医が診察を担当したのは15校であったが、他科医師との検診結果の相違は軽度であった。

今回の調査では、鼻アレルギーのある学生が5~6%と他の所見に比べずばぬけて高率であった。前回の白書でも高率(1.8%)では

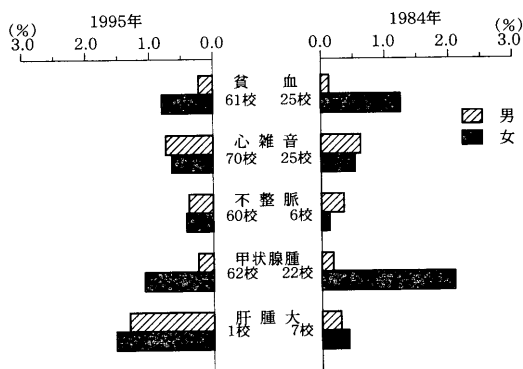


図1 内科検診における有所見者の頻度

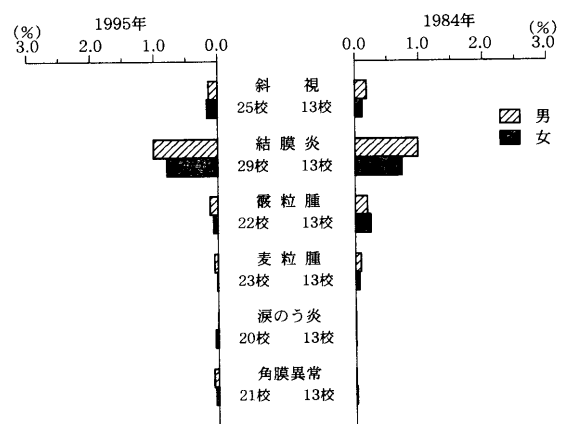


図2 眼科検診における有所見者の頻度

あったが、さらに3倍に増加している。その他の所見はいずれも1%以下である。近年ヘッドフォンなどで問題になっている難聴は今回初めて調査したが0.37%であった。

皮膚科検診

項目により実施大学数が異なるが、特にアトピー性皮膚炎の検診実施大学数は29校と多く、これのみを取り上げて皮膚科検診を行った大学が存在した(図4)。アトピー性皮膚炎は2.5%と高率に認められたが、診断率は大学による差が大きく、診断基準が必ずしも一定でないことがうかがえた。これまでのアトピー性皮膚炎に関する報告では、前田ら⁶⁾が、大学一年生について、皮膚科医の診察により5%の成績を、片平ら⁷⁾が同じく一年生で4%の頻度を報告している。また木村ら⁸⁾の小中学生の調査によると、10-11歳にピーク(15.8%)があり、14-15歳でも6.8%と高い。

歯科検診

う蝕に関する6大学の成績を図5に示した。

う蝕保有率は男子92.4%、女子94.6%で、ともに90%を越えているが、1984年(95.2%、96.7%)に比べて多少減少傾向が見られる。この中には治療済みのものも含まれており、未処置歯保有率は男子42.1%、女子36.2%で、これも前回(50.8%、38.4%)より減少している。女性は男性に比べてう蝕保有者は高率であるが、未処置歯保有者は少なく治療率が高いと言える。1993年の厚生省の歯科疾患実態調査⁹⁾における18歳の成績では、う蝕保有率100%、未処置歯保有率59.8%で、これに比べると今回のデータはいずれも低率で、大学生の口腔衛生状況は同年齢の青年の中では良好と言えるかもしれない。学校保健統計によると⁵⁾、高校生のう蝕は90.6%(平成7年)、未処置歯保有者は41.9%で、いずれも近年減少傾向を示しており、小、中学生はさらに低い。

歯周疾患、不正咬合はそれぞれ4校と3校の集計である(図6)。歯周疾患については、歯肉炎、歯周炎をまとめて歯周疾患として集計したが、う蝕に比べ大学による異常率の差が大きかった。CPITN(Community Peri-

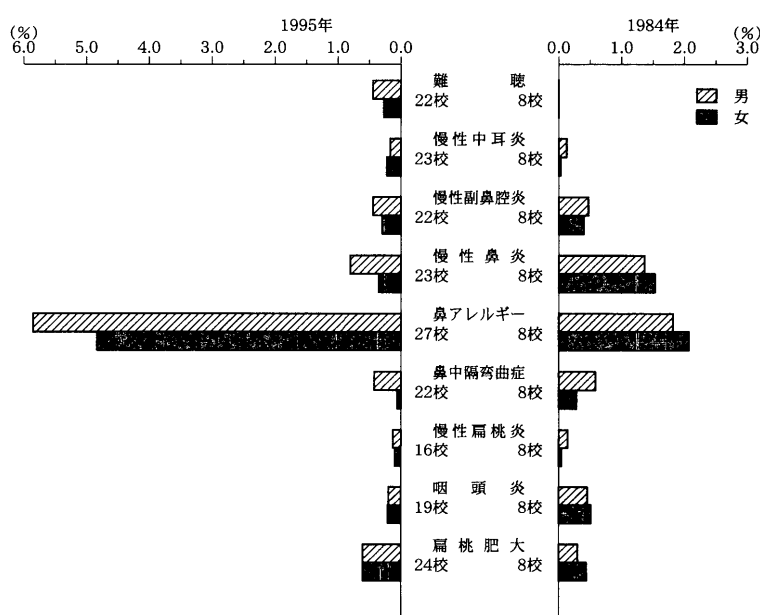


図3 耳鼻咽喉科検診における有所見者の頻度

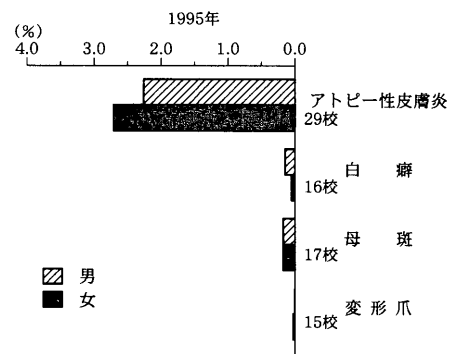


図4 皮膚科検診における有所見者の頻度

odontal Index of Treatment Needs)による審査を原則としたが、診察時の姿勢、臥位か坐位か、審査する歯の数、一人にかけられる時間などによる影響が大きいと思われる。歯周疾患は男性が50%を越えているのに対して、女性は40%以下と低率であった。厚生省の実態調査では⁹⁾、18歳の歯肉炎又は歯周炎の所見を有するものは62%である。不正咬合は男女差はあまりなく55%であった。

考察

学校保健法によれば、大学生の健康診断で実施すべき項目として、

1. 身長、体重、
2. 栄養状態、
3. 眼の疾病及び異常の有無
4. 耳鼻咽喉頭疾患及び皮膚疾患の有無
5. 結核の有無、
6. 心臓の疾病及び異常の有無、
7. その他の疾病及び異常の有無

があげられている。

このうち内科検診でチェックする項目としては、栄養状態、心臓の疾病および異常、その他の疾病および異常があげられることになる。心雑音、不整脈の実施校が多いのはこれによるとと思われるが、その他の疾病として貧血、甲状腺腫のチェックが高率に実施されて

いるのが分かる。女子の異常率が高いことを反映しているものと考えられる。栄養状態、結核は、身体計測、X線撮影により判定されていると思われる。

眼疾患、耳鼻咽喉頭疾患、皮膚疾患について検診を実施しているのは、今回の調査では半数以下と推定された。これらの検診は全員が対象にするのではなく、内科の検診に際して特に必要と思われた者のみを対象に実施されている可能性が高い。鼻アレルギー、アトピー性皮膚炎が高率に認められ、増加しているが、これらを除くと異常率は極めて低い。

今回取り上げた歯及び口腔の疾病に対する検診は、大学生では省略してよいことになっている。しかしその異常率はずばぬけて高率である。

診察による検診の重要性について考える上で問題になるのは、有所見者のうち実際に治療や指導が必要な学生がどの程度認められたかということである。今回の調査では、残念ながら精密検査の結果が把握出来ていないので、特に心雑音や不整脈などの内科疾患におけるこの割合は明らかでない。しかし、今回増加が認められたアレルギー疾患などは、直ちに治療は必要でなくても、生活指導は重要になる。また歯科疾患について言うと、う蝕の未処置歯保有者は即要治療者であり。歯周

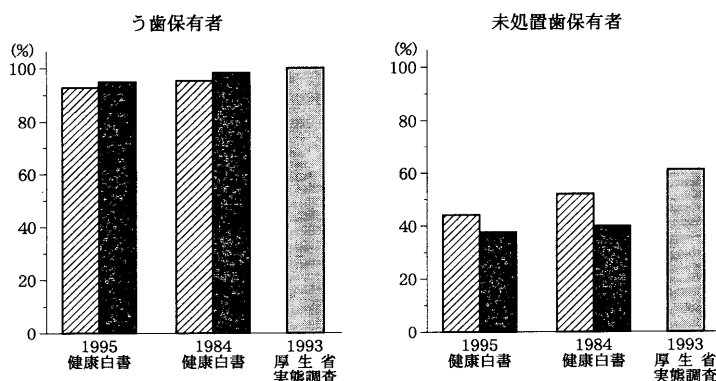


図5 う蝕罹患状況

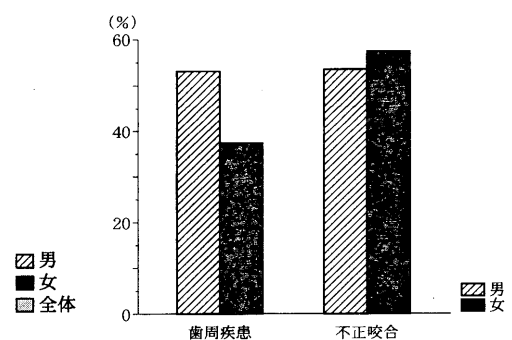


図6 歯周疾患・不正咬合罹患状況

疾患のあるものは、十分な口腔衛生指導こそ大切である。

大学生における健康診断がどのようなべきか、今回の調査は必ずしも十分とは言えないが、これを参考に検討すべきであると思われる。

まとめ

1. 医師による内科，眼科，耳鼻咽喉科，皮膚科検診の結果，個々の項目についての有所見率は，大部分低率（1%以下）であったが，鼻アレルギー（5.5%）とアトピー性皮膚炎（2.4%）の高率が目立った。鼻アレルギーは，1984年の白書データにくらべ，3倍の増加を示した。
2. 歯科検診の結果では，有所見率は95%と極めて高率であった。う蝕の未処置歯保有者は減少傾向を示したが，なお40%存在するほか，歯周疾患が約半数に認められ，歯科領域の健康管理の必要性がうかがえた。

文 献

- 1) 学生の健康白書作成に関する委員会：学生の健康白書1984。国立大学保健管理センター所長会議，1988
- 2) 学生の健康白書作成に関する委員会：学生の健康白書1995年。国立大学保健管理施設協議会，1997
- 3) 岸田繁他：甲状腺検診の試み。第33回全国大学保健管理研究集会報告書 370-373，1995
- 4) 太枝徹他：大学生甲状腺検診の意義。第33回全国大学保健管理研究集会報告書 374-376，1995
- 5) 文部省大臣官房調査統計企画課：学校保健統計調査報告書平成8年度。1997
- 6) 前田真由美他：大学生におけるアトピー性皮膚炎の実態。第34回全国大学保健管理研究集会報告書 495-498，1996
- 7) 片平敬子他：アトピー性皮膚炎患者(女子大学生)実態とケアの必要性。第31回全国大学保健管理研究集会報告書 449-452，1993
- 8) 木村有子他：学校定期健康診断におけるアトピー性皮膚炎の調査。西日皮膚56-1187-1191，1994
- 9) 厚生省健康政策局歯科衛生課：平成5年歯科疾患実態調査報告。1995
(本論文の要旨は第35回全国保健管理研究集会で発表した。)